

<セッション3>

「満州」の科学・技術・医学史：ネットワーク・アプローチ2（医学）

周程「中国における満州科学史・医学史研究のフロンティア」

杉山滋郎「雪氷科学者 中谷宇吉郎にみる「満洲」と「冷戦」」

慎蒼健「帝国における伝統医学研究の系譜—京都、京城、台北、満州、北京」

末永恵子「満州医科大学と地域社会」

周程(北京大学) Zhao Cheng

「中国における満州科学史・医学史研究のフロンティア」

Abstract & Regume, to be delivered on the spot.

雪氷科学者 中谷宇吉郎 にみる 「満洲」と「冷戦」

北海道大学
杉山滋郎

中谷宇吉郎、概観

- 雪の研究
 - 「雪は天から送られた手紙である」
 - 寺田寅彦を継ぐ、科学随筆家
- 氷の研究

知られざる中谷

- 無視されてきた著作群
 - 著作集や全集の偏り
- 知られていなかった史料
 - 国内外で発掘

戦時中

満洲にたびたび調査旅行

- 満鉄に、凍上対策を指南
- 満鉄の低温実験室を視察
- 満鉄から北大に人を受入れる
 - 鉄道技師
 - 原田干三(南満工業専門学院・土木工学教授)
 - 「最近のソ連の実相」

満鉄と中谷を結んだ人物

- 高野與作
- 「気骨ある」技術者

軍部への批判とソ連への共感

- 津田左右吉事件への怒り
- 『寒い国』
- “計画的科学”を高く評価
- ただし...
 - 政治体制・経済体制には言及なし
 - 日本の侵略自体は不問

敗戦後まもない時期

TVAへの関心

- 資源調査会、水部会
 - 新しい資源観
 - TVAを範例に
 - 都留重人ら、TVA懇談会
 - 満洲人脈
 - 高野與作が中谷を誘う
- 雪は資源
 - 資源量の調査
 - 科学に基づいた計画的資源開発を！
 - GHQのサポートも得て
- その後も、ビッグ・プロジェクト嗜好

アメリカ訪問(1949年秋)

- ビザ、おりない
- 茅誠司の助け
- SIPRE(1949年3月創立)で助言
Snow, Ice, and Permafrost Research Establishment

冷戦期(1950年代前半)

SIPREでの研究生活(1952~54年)

- 「基礎研究を自由にしていればよい」
- SIPREの体制

SIPREの役割は

- 冷戦への対応
 - 朝鮮戦争での手痛い経験も
- 中谷から学びとる

中谷の発言

- 1954年3月、第5福竜丸事件
- 「ちえのない人びと」
- *Chicago Daily News* の記事
 - マッカーシー旋風も
- 反ソ感情

中谷の発言(その2)

- 米軍からの研究費受入れ
- 「基礎研究なんだから...」
- 議論、深まらず
 - 中谷に、“毒舌”と“ずるさ”
 - 教授会での発言
 - SIPREの位置づけ
 - 批判が、形式的 or 教条主義的

課題

- 中谷の戦時研究をどう評価するか
 - 高野與作と中谷宇吉郎に通底する問題

1. はじめに—「帝国の伝統医学」を問う

1930年代末、満洲国では漢方医の存続問題が政治的に重要なピックとなっていた。1937年4月には、満洲医科大学学長・久保田晴光（薬物学教室教授）の指導下で、東亜医学研究所の岡西為人が「満洲における漢方医の実情」（『東亜医学研究』第一篇）を発表し、漢方医の存続を主張した。同年、京都帝大医学部の森島庫太（名誉教授）と東京帝大医学部の林春雄（名誉教授）は薬物学者・薬理学者として、満洲国で漢医に資格を認めるのは医学の進歩普及を阻むものであるという立場から、外務省文化事業部に対して現地の視察を申し入れている¹。一方、1938年に発足した東亜医学協会に結集した日本漢方医は、京城帝大医学部の杉原德行（薬理学第二講座・教授）を漢方医学擁護派の「薬物の側の権威者」として賞賛している²。杉原は満洲医科大学の岡西と協議し、自ら新京に出向き、薬理学の立場から漢薬漢方の優れた点を高揚し、東亜医学協会で活動する漢方医の矢数道明や龍野一雄と連携し、漢方医存続に尽力したと伝えられている。1940年11月に東亜医学協会が新体制を公表したとき、提携先には京城帝国大学薬理学第二講座の石戸谷勉と満洲医科大学の岡西の名前が挙げられていた。

ここで紹介した人々は、植民地帝国日本の大学医学部薬物学（後に薬理学）教室において、伝統医学研究に関与した研究者である。1930年代末、彼らは満洲国の漢方医存続問題で大きく二つの立場に分かれ、一部の者たちは日本の漢方医と共闘した。本発表では、彼らの系譜を跡付けると同時に、漢方医存続に対する是非だけでなく、伝統医学に対する研究態度の異同を明らかにしたい。報告者はこの考察を通じて、「帝国の伝統医学」とは何かという問いに、ある程度の輪郭を与えるつもりである。

2. 薬物学（薬理学）ネットワークの形成と展開

1900年、京都帝国大学医科大学に薬物学講座が開講し、森島庫太が教授として着任した³。杉原德行（1892-1976）は1920年に京大を卒業し、森島門下に入るが、そこでは既に漢薬、生薬の薬理学研究が行われており、彼はそこで十分なトレーニングを受けた。もう一つの

¹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015692300、東京帝大教授林春雄外二名（中止）・1937年8月／本邦人満支視察旅行関係雑件／補助実施関係第八卷（外務省外交史料館）。

² 龍野一雄「満洲の旅」『東亜医学』第19号、1940年8月15日、7頁。

³ 1899年、京都帝国大学医科大学設置。1903年、京都帝国大学医科大学は、京都医科大学と福岡医科大学に分割。1911年に福岡医科大学が九州帝国大学医科大学へ。よって、京都医科大学も京都帝大医科大学へ。森島庫太（1868-1943）は東大薬物学教室で高橋順太郎（教授）の助手となり、留学後の1900年に京都帝大教授。のち医学部長。多数の生薬の有効成分を発見すると同時に、その薬理をあきらかにした。一方、林春雄（1874-1952）は1900年に東京帝国大学医科大学助教授、1902年～1905年まで留学、その後は福岡医科大学へ。1908年に東京帝大医科大学薬物学第二講座の教授になる。国立公衆衛生院初代院長、日本薬理学会初代会長などを歴任。

植民地大学である台北帝国大学医学部薬物学講座の教授には森島門下の杜聡明（1893—1986）が、満洲医科大学薬物学講座には久保田晴光（1884・？）が就任し、京都学派は京城帝大、台北帝大、満洲医大で薬物学講座の教授ポストを確保したのである。

杉原や杜が京都で学んでいた 1920 年代とは、複数の大学で薬物学（薬理学）講座が開講され、専門学問として制度化されていく時代であった。学会設立に先んじて、日本最初の薬物学ジャーナル『日本薬物学雑誌(Folia japonica pharmacologica)』が 1925 年に、京都帝国大学医学部薬物学教室の森島庫太の教授在職 25 周年を記念して、その門下生らによって創刊された。京城帝大医学部が設立された 1926 年には、第 7 回日本医学会で初めて薬物学単独の分科会が開催されるが、その場で日本薬理学会の設立が決定され、翌年には東京帝国大学薬物学第二講座教授の林春雄が会長となり、日本薬理学会が開催される。その後、第 14 回日本薬理学会（1940 年 5 月）における議決を経て、1941 年 1 月号（第 31 巻第 1 号）から、『日本薬物学雑誌』は日本薬理学会の機関誌となる。一方、1944 年の第 40 巻からは、日本薬理学雑誌と改題され、慶應義塾大学医学部薬理学教室の阿部勝馬の教授在職 10 周年を記念して刊行されていた『実験薬物学雑誌』（1929 年創刊）が統合された。

京城帝大医学部に薬理学・漢薬講座が置かれる頃、「内地」では既に、人参・漢薬に対する薬学・化学アプローチ（東京帝国大学）と薬理学アプローチ（京都帝国大学と慶応大学）が制度化され、学会を含めた広範な研究ネットワークが成立していたのである⁴。

1930 年代末になると、京城帝大薬理学講座の 3 名（教授：杉原徳行、助教授：加来天民、講師：石戸谷勉）は、満洲との関係を強化しながら、国立北京大学医学院で薬理学研究を展開していく。1939 年（民国 28 年）には、加来天民が北京大学医学院の薬理学副教授となり、翌年には教授に昇任、42 年には中医研究所主任となる。また、石戸谷勉も 1942 年（民国 31 年）に北京大学医学院の副教授兼中医研究所副研究員となっている。杉原は 1940 年に満洲国漢方医研究委員に就任し⁵、それ以降も、満洲国で漢方医の存続に尽力し、1937 年に設立された新京医科大学では臨時講師として漢方医学講座を担当することになる⁶。

京都を出自とする薬理学研究の系譜は、京城、台北、奉天（満洲）へ、さらに植民地都市・京城を拠点として北京、新京へと連なっていた。

3. 異色の漢方医学研究機関設立案—京城・杉原徳行と台北・杜聡明

一般的に薬理学者は、東大初代薬物学教授の高橋順太郎をはじめとして、漢方医が使用する漢薬に対して深い関心を抱いている⁷。それは、薬学者も同様である⁸。総じて薬学者、

⁴ 京城帝大医学部における漢薬研究の歴史については、拙稿を参照のこと。慎蒼健「경성제국대학에 있어서 한약연구의 성립」『사회와 역사』76 巻、2007 年冬号、105-139 頁。

⁵ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A04018569800、京城帝国大学教授杉原徳行満洲国政府ノ委嘱ニ応シ且旅費並報酬ヲ受クルノ件・1940 年・第 57 巻（国立公文書館）。

⁶ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04012777500、各国ニ於ケル医学及医術関係雑件ノ満洲国ノ部 10・満洲国新京医科大学臨時講師招聘関係・1940 年（外務省外交史料館）。

⁷ 高橋順太郎「薬學ト藥物學ノ關係」、『薬學雑誌』第 52 号、公益社団法人日本薬学会、1886 年 6 月 26 日、228-232 頁。

薬理学者は漢方医学から漢薬だけを切断し、漢方医学それ自体は非科学的であるとして研究対象から排除するのが常態であった。

しかし、京大・森島庫太の下で薬物学を学び、植民地の朝鮮と台湾の帝国大学にて薬理学の教授となった杉原徳行と杜聡明の伝統医学に対する研究態度は、そのような常態の中では異彩を放っていた。二人の間に個人的な交流があったかどうかは不明だが、彼らは伝統医学と漢薬を切断せず、伝統医学そのものを研究対象とすべきと考え、杜は1928年に「漢方医学病院」、杉原は1939年に「臨床的漢方医学研究機関」の設置を提案する⁹。

杜聡明は1922年に京大で博士を取得した後、ヨーロッパと北アメリカに28ヶ月間におよぶ留学を行い、東京帝大内科学の板倉武が1925年に発表した「治療学」からも刺激を受けて¹⁰、「実験治療学」を提唱した。雷祥麟によれば、この研究ビジョンには斬新で議論の余地がある「研究プロトコル」が含まれているという。伝統的な生薬研究の従来のアプローチでは、研究者は最初に有効成分を分離して、そして動物や被験者で試験を行う。しかし、杜聡明はこれらの過程を逆順で行う。すなわち、「実験的治療学として特定の生薬の治療学的有効性を最初に確認し、それから研究室にこれらの生薬を持ち込んでその有効成分を分離する」ということを考えたのである。たとえば、マラリアを治療するために柴胡と常山のように、特定の疾患を処置する際には治療効果があるとされている生薬について、有効成分がまだ特定されていないときは、それらの研究において最初に実験治療学を行わなければならない。一旦それらの有効性が確認されれば、次に研究の順番を逆転させ、その生薬を研究室へ送り、化学的および生物学的に厳密な実験を行う¹¹。杜聡明は当時、倫理的・科学的に強い批判を受けるが、伝統医学の治療学としての優位性を評価し¹²、その治療効果を研究するために「漢方医学病院」の設置を提唱したのである。

一方、京城の杉原に革新的な研究ビジョンはなかったが、朝鮮が大陸兵站基地となる戦時総動員体制期に入ると、彼は漢方医学研究の重要性を主張し始める。多くの漢方擁護派と同じく、杉原も伝統医学の臨床医学上の長所を治療学と考える。しかし、彼の「臨床的漢方医学研究機関」設置の議論はきわめて時局的であった。日本人が中国大陸に進出するうえで、現地の医療を担う漢方医の「善導」が不可欠であり、そのために漢方医学その

⁸ 1893年、帝国大学医科大学薬学科に初めて制定された三講座のうち、薬学第一講座は生薬学として教授下山順一郎によって開講された。日本伝統の本草学を近代的な生薬学に転換させたのである。後に帝国大学は東京帝国大学となり、薬学第一講座の担当となった朝比奈泰彦は、1910年代から和漢薬成分の化学的研究を開始した。

⁹ いずれも実現しなかった。

¹⁰ 板倉武(1888-1958)は、東京帝国大医科大学第一内科学教室講師を経て、同愛記念病院内科医長などを歴任。太平洋戦争の末期に政府から研究費を得て、同愛記念病院内に東亜治療研究所(のち東方治療研究所と改称)を設立し所長となり、漢方部門に大塚敬節を招聘した。主著に『治療学総論』(1928)など。
¹¹ 雷祥麟「中国医学の研究方法论—1920年代台湾での杜聡明のケースから」『薬史学雑誌』48(1)、2013年、12頁。

¹² 明治期以降の日本漢方医学者たちも、和田啓十郎以来、伝統医学の治療面での優位性を主張し、『傷寒論』を高く評価するが、杜聡明にも伝統医学を傷寒論で代表させる見方が強い。この問題については別に議論することにする。日本の漢方医学者の自画像については、拙稿「日本漢方医学における自画像の形成と展開—「昭和」漢方と科学の関係」金森修編『昭和前期の科学思想史』勁草書房、2011年、311-340頁。

ものを研究する機関の設置が要請される。具体的には、漢方病院を設立して、内科的方面での治療を主として、鍼灸医学の研究も含むものとする。杉原が提案した漢方医学研究所（あるいは東洋医学研究所）はやがて、朝鮮を超え、中国大陸、満洲までを含んだ一大研究所構想へと拡大し、東亜医学運動の主導者の一人矢数道明からも賛同を受け、東亜医学運動と連携した動きとなっていく¹³。

4. 中国医学研究から東亜医学研究へ—満洲医科大学のケース

本報告において注目するのは、満洲医科大学の二つの研究室、つまり薬物学教室と中国医学研究室である。1934年の満洲医科大学一覧によれば、薬物学教室には久保田晴光を含め6名のスタッフが、中国医学研究室には教授として黒田源次（文学博士）が、講師として岡西為人が所属した。

久保田は京都医科大学の助手時代から既に薬物学研究で頭角を現し、エフェドリンの気管支平滑筋や循環器系に及ぼす影響について論文を葉発表している¹⁴。満洲医大に移った後も、彼は呼吸器疾患とくに喘息に効果のある漢薬の調査・発見と、そこから分離されたアルカロイドの薬理作用に関する論文を着実に生産し、主として『日本薬物学雑誌』上で発表していく¹⁵。ある治療に効果的だと評価されているローカルな漢薬の調査に始まり、薬学者と協力しながら、その有効成分の薬理作用を研究するという方法は、典型的な帝国の伝統医学研究スタイルである。

久保田型薬物学研究の基盤には、漢薬のフィールドワークはもちろんのこと、中国医書の文献学的研究が不可欠である。この部分を担ったのが、中国医学研究室に所属しながら、久保田と協働した岡西為人であった。二人の仕事は、久保田晴光・岡西為人共編『和漢薬標本目録：満洲医科大学所蔵』（1931年）に結実している。以下、岡西の著作もしくは共著作を紹介する。

○南満洲鉄道株式会社庶務部調査課 編『東部内外蒙古調査報告書(第2班) 第3編 (生活状態及医事衛生,気候温度)』南満洲鉄道、1927年。

¹³ 矢数道明「日本醫事新報社の社説を検討し満州國及中國の漢醫問題に及ぶ(三)」『東亜醫學』第20号、1940年、6-7頁。

¹⁴ 1887年、東大薬学教室の長井長義は、漢薬・麻黄から一種のアルカロイドを分離してそれをエフェドリンと名付けた。エフェドリンの薬理作用を世界で初めて報告したのは、1924年に発表した北京 Union 医科大学の Chen (陳克恢) と Carl F. Schmidt だということが世界的に既に定説化されているが、実はそれ以前に日本語で書かれた久保田の論文があった。

¹⁵ 久保田は実際に喘息に効果のある薬も創製していたようである。「ネオアストマトールは数千年来幾百億の治験例を有する皇漢薬中より其精を取って相配し、種々なる呼吸器疾患特に喘息に向って神効ありと称せらる、薬用植物を更に精製して其効力を一層強大的確ならしめた新鎮咳・痰薬である、されば、急性慢性の気管支炎、喘息その他咳嗽咯痰を伴う諸症に用うる時は優秀卓越なる鎮咳・痰の作用を呈するのみならず能く患者の血行を旺盛にし、消耗せる体力を回復、一般諸症状の改善ら著しく効く、又病状の重に従って大量に用うるも悪心、嘔吐、食慾不振等何等嫌な副作用なく、香味佳快で婦人や子供でも好んで服薬出来るのが特長である。ネオアストマトールは南満洲医大の教授久保田晴光博士の創製にて奉天で有名な浪速通の鶴原薬房が製造元である」(『大阪毎日新聞』、1930年10月24日付)。

- 黒田勝次・岡西為人編（満洲医科大中国医学研究室）『中国医学書目』、1931年。
- 満洲医科大学東亜医学研究所編『宋以前医籍考』東亜医学研究所、1936年。
- 満洲医科大学東亜医学研究所 編『東亜医学研究. 第1篇：満洲における漢方医の実情』、1937年。
- 岡西為人『満洲の漢薬』満洲医科大学東亜医学研究所、1937年。
- 満洲医科大学東亜医学研究所 編『東亜医学研究.第2輯 丹薬(黒田源次) 蒙古薬方(黒田源次) 支那産婦人科書考略(岡西為人,佐土丁) 現代漢方戒煙方に就て(項乃義等)』、1939年。
- 岡西為人『日本和漢薬文献：昭和初年・昭和十三年』久保田元學長記念事業委員會、1940年。
- 満洲医科大学東亜医学研究所編『続中国医学書目』東亜医学研究所、1941年。
- 満洲医科大学東亜医学研究所編『東亜医学研究 第3輯』、1944年。

岡西たちの仕事は、日中戦争の拡大とともに、中国医学研究室から東亜医学研究所というより大きな制度の中で展開していく。

5. 帝国の伝統医学研究とは

満洲医大・久保田晴光の薬物学研究は、関心において伝統医学から漢薬のみを切断し、方法としては漢薬のフィールドワーク研究と文献学的研究から出発し、治療効果があると目される漢薬を発見し、一旦は薬学者・化学者に有効成分抽出を預けるものの、抽出された成分の薬理学作用を動物・人体で実験するものであった。この方法は薬物学者の基本的スタイルであり、地域を越えて、京都、京城、台北でも実践されていた。その意味で、共通の方法でローカルな地域での知識を集積していく仕組みが存在していた。

しかし、関心において切断を許容せず、方法として逆順プロトコルを提案した台北の杜聡明、それほど明確ではないが漢方診断・治療の有効性を認め臨床的応用が可能な病院を提案した杉原徳行もまた、帝国の伝統医学研究の内部にいたのである。彼らは異色ではあるが、帝国の伝統医学研究の内部を拡大させ、外部にいた漢方医学者たちを内部化（包摂）するという役割を果たした、まさに「帝国的な」伝統医学研究者であったと言えるのではないか¹⁶。

¹⁶ 新たな包摂は新たな排除を伴う。杜聡明、杉原徳行、日本漢方医学者は『傷寒論』を重視し、陰陽五行説に基づく伝統医学は研究対象から排除した。

中国東北部にかつて存在した満洲医科大学（以下、満洲医大）は、地域社会とどのような関係を結んでいたのであろうか。本報告では、満洲医大の「蒙古」に関する調査・研究・診療を通して、医大と蒙古の地域社会との関わり的一端を素描する。

満洲医科大学は、1911年（明治44）旧奉天（現在遼寧省瀋陽）に南満洲鉄道株式会社（以下満鉄）が創設した医学校・南満医学堂を前身とする医科大学である。南満医学堂の設立の目的は、日中両国の学生に医学を教え、大陸で活躍する医師を養成するというものであった。

1922年（大正11）、この南満医学堂が大学に昇格して満洲医科大学になるが、1945年（昭和20）の日本敗戦とともに制度上大学も終焉を迎えた。日本人の教官と卒業生の多くが敗戦後日本に引き揚げ医学・医療界で活躍した。一方、中国人の卒業生も中国各地において診療・医学教育・医療行政の分野で活躍した。

満洲医大の業績については「医学的未開拓の地に医学の恩恵を施すと共に、医学の研究と併せ、満洲の地方病の調査及びその究明、開拓地始め満洲での生活指導に貢献した」と評価する見解がある。

なるほど、満洲医大の医学研究の特徴のひとつは満洲開拓に関連した保健衛生にある。具体的には、衛生学や生理学の分野では移民の衣食住にかかわる研究、微生物学では満洲で流行する伝染病、病理学では満洲の地方病をテーマにした研究が目を引く。彼らの研究に共通するのは、実際に移民の入植地（あるいは入植予定地）に赴いて衛生に関する調査したり、地方病の発生地へ赴いたりして、それぞれの分野から対策を提言していることである。日本人移民が「満洲」の気候風土に適応するための実践的研究をしていた。研究者たちは、関東局移民衛生調査委員会の委員に就任しており、衛生行政へも積極的に参画していたのである。

したがって、これまで満洲医大といえば、農業移民対策としての開拓医学が強調されてきた。

しかし、満洲医大の研究者たちが開拓移民のための本格的な研究を開始するのは1936年（昭和11）からである。それは、日本人農業移民が日本政府の国策として「満洲」に大量に送出された時期であった。「満洲」への本格的移民期とされる1936年～1941年（昭和16）と軌を一にしている。1940年（昭和15）には学内に開拓医学研究所が開設され、開拓地の衛生学調査研究、特に衣食住についての研究と実地指導にあたった。

実は、開拓医学という国策に沿った課題が出てくる以前、いわば大学を挙げて調査研究の対象としていたのは外蒙古・内蒙古というフロンティアであった。満洲医大は、1923年（大正12）から1938年（昭和13）まで計15回、毎年蒙古地域に巡廻診療団

を派遣していた。これは、夏休みを利用して教官と学生が奥地の住民の診療を行い、かつ諸種の調査を実施するものである。

この巡回診療団の発案は、満鉄から出たもので、みずから「日本文化の恩恵」と謳ってはじめられた。ところが、それほど動機は純粹でなく、満鉄の子会社が牛馬その他の家畜の買い入れを有利に発展させる為に、「沿道の人民にも相当の福利を与へて好意を持たせる必要がある」として、満洲医大に協力を申し込んだためであった。この子会社は、屢々「匪賊」の出没によって買い入れた家畜を運搬する際、被害を受けていた。そこで、「匪賊」の顔役を懐柔するために、巡回診療団が結成されたという。

しかし、家畜の取引のための懐柔策としてのみ診療団が利用されたわけではなからう。なぜなら、満鉄は「外蒙古」を畜産に限らず鉄の産地として開発を目論んでいたからである。満鉄哈爾濱事務所調査課の『外蒙古報告 第一』（1923年〈大正12〉）には「吾曾滿蒙開發ノ声ヲ聞クヤ久シト雖、其ノ中、外蒙古ハ土地遠隔ナルノ故ヲ以テ由来閑却サレタリ。然レトモ其ノ畜産鉄産ニ富ミ、将来開發ノ余地充分アリテ、我国ニ無限ノ原料供給地タルヘク、我立国上、其ノ開拓ハ決シテ等閑ニ附スヘカラサルナリ」と開発の必要性を強調している。

蒙古に対する満鉄のこのような野心を抜きに巡回診療団の意義を把握することはできないだろう。

巡回診療団は、満鉄の事業展開を円滑化するための現地民を手なずけるツールであったばかりではない。蒙古の保健衛生に関する調査研究は、開発のための参考資料を提供することとなったのである。したがって、その意味でも巡回診療団は、現地の住民の保健を第一目的としたものではなかった。

結局巡回診療団は、日中戦争の戦線拡大によって1938年に中止を余儀なくさせられたが、それまでの15回の調査によって、多くの「蒙古」に関する知見の蓄積がなされたと考えられる。そのため、満鉄の創業三十周年記念として、満洲医大は「内蒙古を中心として開発研究所を王府に建設準備をすすめている」（『満洲日日新聞』1936年2月18日付）と報道されている。この記事によると計画はかなり具体的で、事業費の予算額も掲載されている。

しかし、この「蒙古」に関する研究所の設立は実現した形跡がない。おそらく、「蒙古」に関する研究所の企画を温めてはいたものの、「満洲」への大量の農業移民という国策の大きな波が押し寄せたため、大学は開拓衛生の調査研究に舵を切ったのではなからうか。

「蒙古」という地域と満洲医大の関係は、従来開拓衛生の陰に隠れて従来注目されてこなかった。本報告では、「蒙古」への巡回診療報告書を検討しながら、この地域と大学との関係について明らかにしたい。

参加者プロフィール

The profile of participants

◆参加者 List of Participant

○研究会メンバー The members of research groupe

慎蒼健 (東京理科大学)	Shin Chang-Geon, Tokyo University of Science
塚原東吾 (神戸大学)	Togo Tsukahara, Kobe University
加藤茂生 (早稲田大学)	Shigeo Kato, Waseda University
杉山滋郎 (北海道大学)	Shigeo Sugiyama, Hokkaido University
三浦伸夫 (神戸大学)	Nobuo Miura, Kobe University
柿原泰 (東京海洋大学)	Yasushi Kakihara, Tokyo University of Marine Science and Technology
金凡性 (広島工業大学)	Kim Boumsoung, Hiroshima Institute of Technology
瀬戸口明久 (京都大学)	Akihisa Setoguchi, Kyoto University
財城真寿美 (成蹊大学)	Masumi Zaiki, Seikei University

○海外のゲスト Foreign guests

Aaron Moore , University of Arizona	
Loh Shi-Lin 盧詩霖, Harvard University	
Susan Lindee, University of Pennsylvania	
Vassiliki (Betty) Smocovitis, Florida State University	
周程 Zhou Cheng, 北京大学 Beijing University	

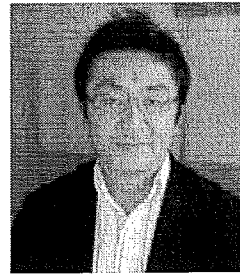
○国内のゲスト Domestic guests

山本晴彦 (山口大学)	Haruhiko Yamamoto, Yamaguchi University
三上岳彦 (帝京大学)	Takehiko Mikami, Teikyo University
松本淳 (首都大学東京)	Jun Matsumoto, Tokyo Metropolitan University
中尾麻伊香 (慶応大学)	Maika Nakao, Keio University
末永恵子 (福島医科大学)	Keiko Suenaga, Fukushima Medical University
鈴木晃仁 (慶應大学)	Akihito Suzuki, Keio University
李海燕 (東京理科大学)	Li Haiyan, Tokyo University of Science
市川浩 (広島大学)	Hiroshi Ichikawa, Hiroshima University

○学生 Student

小松卓司 (神戸大学)	Takuji Komatsu, Kobe University
井沼睦 (神戸大学)	Mutsumi Inuma , Kobe University

慎蒼健



東京理科大学 工学部 教授

専攻分野： 科学史・科学論

研究分野： 東アジア近代科学史／朝鮮近代医学史／科学と帝国主義／物理学史／障害・介助・テクノロジー

昭和前期の科学思想史 金森修、岡本拓司、梶雅範、坂野徹、慎蒼健、板橋勇仁

勁草書房 2011年10月

帝国の視角／死角 慎蒼健、アルノ・ナンタ、菊地暁、坂野徹、泉水英計、與那覇潤、三澤真美恵、木名瀬高嗣 青弓社 2010年12月

朝鮮近代科学技術史研究 朴星来、金成根、任正嫻、申東源、金根培、李吉魯、姜雄、高成鳳、林宗台、慎蒼健、金テホ 皓星社 2010年5月

論文

- 植民地社会の医療化—東京帝大による朝鮮社会の衛生調査とその限界 科学史研究 2012年
- 京城帝國大學漢藥研究之成立 TAIWANESE JOURNAL FOR STUDIES OF SCIENCE, TECHNOLOGY & MEDICINE 2010
- 京城帝國大学医学部の「植民地性」とは何か？—衛生学教室の社会医学研究について 科学史研究 2009年
- 京城帝國大学における漢藥研究の成立 (韓国語, 경성제국대학에 있어서 한약연구의 성립)
- 社会と歴史 (韓国語, 사회와 역사) 2007年12月
- 覇道に抗する王道としての医学—1930年代朝鮮における東西医学論争から— 思想 1999年11月

金 凡性 Kim Bounsoung

広島工業大学 環境学部 地球環境学科 准教授



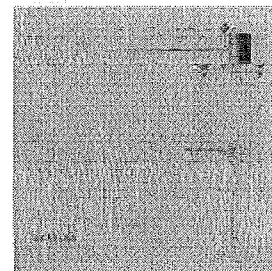
1997年ソウル大学人文学部東洋史学科卒業。2000年同大学院科学史課程修了、理学修士。

2005年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、博士(学術)。

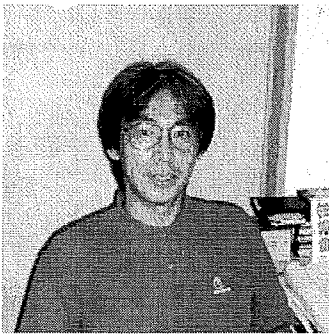
研究テーマ 近現代日本社会における科学技術に関する歴史研究

著書 明治・大正の日本の地震学 東京大学出版会 2007年

明治・大正の
日本の地震学
Kim Bounsoung 著
金 凡性



山本 晴彦



山口大学農学部 生物資源環境科学科 教授

主要な研究業績 帝国日本の気象観測ネットワーク 満洲・関東州 農林統計出版 2014年



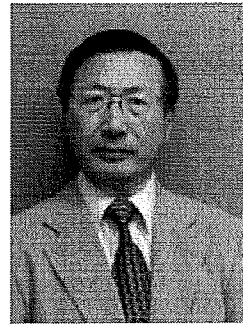
Yamamoto, H.・Iwaya, K: Changes in Cultivation of Wheat and Barley of Off-season Cropping in Paddy Field of Western Japan and Use of Domestic Wheat and Barley as Teaching Materials, *J.Japan.Agric.Educ.*, 33, 1-10 (2002)

Yamamoto, H.・Iwaya, K: Characteristics of Heavy Rainfall and Flood Damage in Aichi Prefecture from September 11th to 12th 2000, *J.Natural Disaster Science*, 24, 15-24 (2002)

Katsuma S, Kobayashi J, Koyano Y, Matsuda-Imai N, Kang W, Shimada T (2012) A baculovirus-encoded protein BV/ODV-E26 determines tissue tropism and virulence in lepidopteran insects. *Journal of Virology*, 86, 2545-2555.

Yamamoto, H.・Iwaya, K・Takasu, Y: Comparisons of Efficiency of Solar Energy Utilization and Efficiency of Solar Energy Conversion in High Yielding Rice Canopies, *J.Agric.Meteoro.*, 59, 1-11(2003)

三上岳彦



帝京大学 史学科 教授

1969年03月 東京大学理学部卒業

1977年03月 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）

東京大学教養学部助手，お茶の水女子大学文教育学部講師・助教授，東京都立大学理学部助教授・教授，首都大学東京都市環境学部・大学院都市環境科学研究科教授を経て

2008年04月帝京大学文学部 教授 首都大学東京 名誉教授

専門分野

気候学（都市気候学、気候変動）、自然地理学

研究テーマ

- ・都市の気候変動（都市のヒートアイランド、都市内緑地のクールアイランド効果等）に関する研究
「高密度観測と気象モデルに基づく首都圏夏期気温・降水量分布の動態解明」（平成22-24年度・科学研究費基盤研究(B)代表）
- ・歴史時代の気候変動（小氷期の気候復元、幕末期の気候変動等）

著書・論文 学術論文・共著 2011年 | 地学雑誌, VOL.120, 317-324.

広域METROSによる首都圏高密度気温観測とその気候学的意義

学術論文・共著 2011年 | 地学雑誌, VOL.120, 325-340.

夏季日中における首都圏のヒートアイランド現象に海風が与える影響

学術論文・共著 2011年 | 地学雑誌, VOL.120, 309-316. 東京における高密度気象観測システム

松本淳

首都大学東京 教授

専門・研究分野 気候学、気象学、自然地理学

最終学歴・学位 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了・博士（理学）

研究テーマ モンスーン気候学、気候変動、気候環境論

論文

- ・ VILLAFUERTE II, M. Q., MATSUMOTO, J., AKASAKA, I., TAKAHASHI, H. G., KUBOTA, H., AND CINCO, T. A. 2014: LONG-TERM TRENDS AND VARIABILITY OF RAINFALL EXTREMES IN THE PHILIPPINES. ATMOSPHERIC RESEARCH 137: 1-13.
- ・ KIGUCHI, M., MIYAZAKI S., KIM, W., KANAE, S., OKI, T., MATSUMOTO, J. AND SATOMURA, T. 2013: THE HEAT FLUX FROM THE LAND SURFACE DURING THE PRE-MONSOON SEASON IN THE INLAND REGION OF THAILAND CLIMATE AND LAND SURFACE CHANGES IN HYDROLOGY, IAHS PUBL. 359, 239-245.
- ・ 内山真悟・松本 淳・高橋 洋・金森 大成 2012. 熱帯降雨観測衛星 TRMM を用いたアフリカ大陸熱帯域における雷活動と降水の季節変化. 地学雑誌 121: 986-997.
- ・ 高橋 洋, 浅田寛太, 赤坂郁美, 松本 淳 2012. 日本における台風接近・通過時の危険半円外での強風、風工学シンポジウム論文集 22: 115-120.

著書

- ・ ZHOU, T. J, HSU, H. H. AND MATSUMOTO, J. 2011. SUMMER MONSOON IN EAST ASIA AND THE WESTERN NORTH PACIFIC. IN C. P. CHANG ET AL. EDS. THE GLOBAL MONSOON SYSTEM (2ND ED.). WORLD SCIENTIFIC, 43-72.
- ・ 松本 淳・浅田晴久・林 泰一 2009. バングラデシュにおける洪水とサイクロン. 日本地理学会災害対応委員会／平井幸弘・青木賢人編「温暖化と自然災害ー世界の六つの現場から」 古今書院, 35-57.
- ・ 松本 淳 2007. 世界の気象災害. 世界の地域問題(共著), ナカニシヤ出版, 10-11.
- ・ 松本 淳 2006. 東アジアのモンスーンと屋久島の気候. 世界遺産屋久島(共著), 朝倉書店, 1-4.

◆ The profile of conference participant

“Science and Empires, what is the “British” Networks of Science?: from the perspective of colonial forestry and environment management.”

◆ 塚原東吾 (Togo TSUKAHARA)

➤ 神戸大学国際文化学部教授

◆ Affiliation

Kobe University

◆ Section

Graduate School of Intercultural Studies,
KOBE University Graduate School of
Intercultural Studies



◆ Job title

Professor

◆ Misc

"The Japanese Colonial Sciences in the Greater East Asian
Co-Prosperity Sphere: Mere Successor of the Europeans, or the
Initiator of the New Era?" VI, 175-188 1996

"Des Paysages Culturels a jamais entremeles" 41, 20-32 1997

Bewogen Betrekkinge: Udagawa Yoan, de grondlegger van de
scheikunde in Japan, 96 2000

Historisch meteorologie in de 19de eeuwse Japan 2002

Pre-1872 extension of the Japanese instrumental meteorological
observation series back to 1819, 16, 118-131 2003

財城 真寿美

Masumi Zaiki

准教授

■最終学歴 東京都立大学大学院理学研究科地理科学専攻

■学位 種類: 博士(理学)

授与大学: 東京都立大学

取得年月: 2004年3月

■専門分野 自然地理学、気候学、環境 GIS

■研究業績(主な著書・論文等)

財城真寿美, 木村圭司, 戸祭由美夫, 塚原東吾 幕末期(1859~1862年)のロシア領事館における気象観測記録と気象庁データの均質化にもとづく函館の気温の長期変動 地理学論集, 89, 20-25. 2014

財城真寿美, 三上岳彦 東京における江戸時代以降の気候変動 地学雑誌, 122, 1010-1019. 2013

財城 真寿美 新用語解説「データレスキュー」 天気, 58, 173-175. 2011

Zaiki, M., Können G.P., Kimura, K., Mikami, T. and Tsukahara, T. Reconstruction of Historical Pressure Patterns over Japan Using Two-Point Pressure-Temperature Datasets since the Nineteenth Century. Climatic Change, doi: 10.1007/s10584-009-9563-9. 2009

財城真寿美, 小口 高, 小池司朗, 山内昌和, 香川雄一, 江崎雄治 市区町村単位のデータに基づく日本の人口と地形との関係—現状と時間変化— 「シンフォニカ研究叢書 人口・居住と自然—GISによる分析—」(財)統計情報研究開発センター 2009

Zaiki, M. and Tsukahara, T. Meteorological Networking and Academic Research in Meteorology at the Southern Frontier of the Empire. East Asian Science, Technology and Society: an International Journal, 1(2), 183-203. 2008

Zaiki, M., Können, G.P., Tsukahara, T., Mikami, T., Matsumoto, K. and Jones, P.D. Recovery of 19th Century Tokyo/Osaka Meteorological Data in Japan. International Journal of Climatology, 26, 399-423. 2006

財城真寿美, 塚田友二, 福與 聡, GeoEcology Network. 温暖化実験で生じた高山植物分布の変化—中央アルプス木曾駒ヶ岳を例として— GIS—理論と応用—, 11, 23-31. 2003

Zaiki, M., Kimura, K. and Mikami, T. A Statistical Estimate of Daily Mean Temperature Derived from a Limited Number of Daily Observations. Geophysical Research Letters, 29(18), 39.1-39.4. 2002

財城真寿美, 塚原東吾, 三上岳彦, Können, G.P. 出島(長崎)における19世紀の気象観測記録. 地理学評論, 75, 901-912. 2002

AARON MOORE

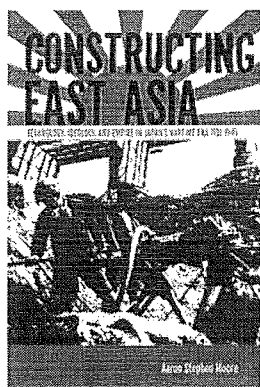


Aaron.S.Moore@asu.edu

Publications and Other Intellectual Contributions

Aaron S. Moore." "The Yalu River Era of Developing Asia: Japanese Expertise, Colonial Power and the Construction of Sup' ung Dam, 1937-1945". *Journal of Asian Studies* (2013).

Aaron Moore. *Constructing East Asia: Technology, Ideology, and Empire in Japan's Wartime Era, 1931-1945*. Stanford University Press (2013).



Aaron Moore; Carla Nappi. Interview: *Constructing East Asia: Technology, Ideology, and Empire in Japan's Wartime Era, 1931-1945*. *New Books in East Asian Studies* (2013).

Review of: *Planning for Empire: Reform Bureaucrats and the Japanese Wartime State*. *Social History* (2012).

瀬戸口 明久

京都大学人文科学研究所 准教授 – Associate Professor SETOGUCHI, Akihisa

■ 学位 博士[文学](京都大学)

■ 専門分野 科学史

■ 研究テーマ 生命科学と社会、人と動物の関係

著書 2013『日本の動物観——人と動物の関係史』(共著)東京大学出版会.

2009『害虫の誕生——虫からみた日本史』(単著)ちくま新書.

論文 2010「狩猟と動物学の近代——天皇制と『自然』のポリティックス」『生物学史研究』84:73-83.

2010「ダーウインを記念する——日本における進化論受容をめぐる歴史認識の形成」『生物学史研究』83:1-19.

2009「『自然の再生』を問う——環境倫理と歴史認識」鬼頭秀一ほか編『環境倫理学』東京大学出版会, 第10章.

2009 “Darwin Commemorations and Three Generations of Historians of Biology,” *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 3: 531-537.

2008「狩猟と皇族——雑誌『獵友』に見る動物をめぐる政治・科学・ジェンダー」『動物観研究』13:39-50.

2007 “Control of Insect Vectors in the Japanese Empire,” *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 1:167-181.

2006「医学・寄生虫学・昆虫学——日本における熱帯病研究の展開——」『科学哲学科学史研究』1:125-138.

2005「害虫・益虫をめぐる動物観」『動物観研究』10:3-8.

2004「サルをめぐる動物観と生物多様性保全」『動物観研究』9:31-36.

2004「害虫観の近代」上田哲行編『トンボと自然観』京都大学学術出版会, 第12章.

2004「日本における進化論の導入」『生物科学』56:23-30.

2003「移入種問題という争点——台湾ザル根絶の政治学」『現代思想』31(13):122-134.

2003「殺虫剤と化学兵器——日本の場合、1918-1945」『化学史研究』30:1-10.

2002「なぜ移入種は排除されなければならないのか？」『生物学史研究』69:41-51.(研究ノート)

2000「生態系生態学から保全生物学へ——生態学と環境問題、1960-1990——」『生物学史研究』65:1-13.

1999「保全生物学の成立——生物多様性問題と生態学——」『生物学史研究』64:13-23.

Shi-Lin Loh

Harvard University, East Asian Languages and Civilizations, Ph.D. Candidate in History and East Asian Languages;
Science and Technology Studies

Research Interests: Modern and Contemporary Japan, Science and Technology Studies, History of Medicine, History of Science and Technology, Modern Chinese History, and Translation

Papers

Narrating Fukushima: Scales of a Nuclear Meltdown [more](#)

Beyond Peace: Pluralizing Japan's Nuclear History [more](#)

Translations Nobody Dies in a Ghost Town: Path Dependence in Japan's 3.11 Disaster and Reconstruction [more](#)

Oguma Eiji The Asia-Pacific Journal, Vol 11, Issue 44, No.1, November 4, 2013.

Radioactive Rain and the American Umbrella [more](#) SHUNYA YOSHIMI The Journal of Asia Studies

Vol.71, No.2 (May) 2012; 1-13

中尾麻伊香 慶應義塾大学

「科学者の自由な楽園」が国民に開かれる時—STAP/千里眼/錬金術をめぐる科学と魔術のシンフォニー

現代思想 2014年8月号 146-159 2014年7月

近代化を抱擁する温泉—大正期のラジウム温泉ブームにおける放射線医学の役割 科学史研究 268 187-199

2013年12月

ノイマン博士の異常な愛情 またはマッド・サイエンティストの夢と現実 現代思想 8月臨時増刊号 総

特集フォン・ノイマン 41(10) 226-238 2013年7月

放射線をめぐる医学調査：原爆調査からビキニ被災調査まで 生物学史研究 (87) 27-33 2012年9月

変容と破壊をめぐる想像力—再来する錬金術師たち ユリイカ 特集・荒川弘(12月号) 152-159 2010年12月

近代日本の脳病薬広告にみる脳 中尾麻伊香・住田朋久 UTCP「脳科学と倫理」プログラム編『脳科学時

代の倫理と社会』 239-260 2010年3月

Representations of the Brain in Modern Japan— Through Analysis of Medicine Advertisements in the Meiji, Taisho and Showa Periods KAO Maika, SUMIDA Tomohisa, ASAKURA Reiko

The Proceedings of the 4th BESETO Conference of Philosophy 563-569 2010年1月

The Image of the Atomic Bomb in Japan before Hiroshima *Histria Scientiarum* 19(2) 119-131 2009

Toward Catastrophe: Images of Atomic Energy in Western and Japanese Literatures

The Proceedings of the 3rd BESETO Conference of Philosophy 353-360 2009年1月

日本における「原爆」観—戦前から原爆投下まで— 修士論文に代わる論文 (東京大学大学院総合文化研究科)

2008年1月

Susan Lindee



Professor, Janice and Julian Bers Professor of History and Sociology of Science
on leave 2014-2015 Ph.D., Cornell University; M.S., Cornell University; B.S., University of Texas at Austin

Research Interests: Gut Feelings and Technical Precision: Thinking about Cystic Fibrosis; Rational Fog: A social history of weaponized truth — science in the Cold War; Co-organizer, with Ricardo Santos, of a Wenner-Gren Symposium, 2010, on the comparative history of biological anthropology.

Selected Publications:

“Performing anger: H.J. Muller, James V. Neel, and radiation risk.” In Bernd Gausemeier, Staffan Muller-Wille and Edmund Ramsden, eds., *Human Heredity in the Twentieth Century*. 2013, London, Pickering and Chatto, 205-215.

“Map Your Own Genes: The DNA Experience.” 2013, In Sheldon Krimsky and Jeremy Gruber, ed., *Genetic Explanations: Sense and Nonsense* Cambridge: Harvard University Press. 186-200.

Co-editor, with the Brazilian anthropologist Ricardo Ventura Santos, of a special issue of *Current Anthropology*, “The Biological Anthropology of Living Human Populations: World Histories, National Styles and International Networks,” based on our conference March 2010, publication April 2012.

Susan Lindee and Rebecca Mueller, 2011. Is Cystic Fibrosis Genetic Medicine’s canary? *Perspectives in Biology and Medicine*, Vol. 54, No. 2, Summer 2011, pp. 316-331.

“Experimental Wounds: Science and Violence in Mid-Century America” 2011. In Susan Smith, ed., “Health Legacies: Militarization, Health, and Society” *Journal of Law, Medicine & Ethics*, v. 39, n. 1 (Spring) 8-20.

Books:

Moments of Truth in Genetic Medicine 2005 Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Genetic Nature/Culture: Anthropology and Science Beyond the Two Culture Divide With Alan Goodman and Deborah Heath, edited volume from a Wenner-Gren Foundation Symposium. University of California Press, 2003.

The DNA mystique: The gene as a cultural icon with Dorothy Nelkin. 2004. New edition, Ann Arbor: University of Michigan Press. Originally, 1995, New York: W.H. Freeman. Translations: Japanese, 1997; French 1998.

Suffering Made Real: American Science and the Survivors at Hiroshima Chicago: University of Chicago Press, 1994.

Vassiliki Betty Smocovitis

Professor, History of Science



PhD Cornell University

Departments of Biology and History, University of Florida

Elizabeth Wood Dunlevie Honors Term Professor 2014-2015

Distinguished Alumni Professor 2009-2011

Phi Beta Kappa Visiting Scholar 2008-2009

Unifying Biology: The Evolutionary Synthesis and Evolutionary Biology (Princeton: Princeton University Press, 1996)
248 pages (Choice, Outstanding Academic Book of 1997.)

With Daniel J. Crawford, editors. The Scientific Papers of G. Ledyard Stebbins, Jr. (1929-1930). Edited and with an
Historical Introduction. A. R. G. Gantner Verlag: Ruggell, Liechtenstein, 2004. Regnum Vegetabile, volume 142. (pdf)

With Victoria Hollowell and Eileen Duggan, editors. The Ladyslipper and I by G. Ledyard Stebbins. Missouri Botanical
Garden Press, 2007.

The Plant Drosophila: E. B. Babcock, the Genus *Crepis* and the Evolution of a Genetics Research Program at Berkeley,
1912-1947. Historical Studies in the Natural Sciences (2009a): 300-355. (pdf).

Keeping Up with Dobzhansky: G. Ledyard Stebbins, Plant Evolution, and the Evolutionary Synthesis, History and
Philosophy of the Life Sciences 28 (2006a): 11-50. (pdf)

The 1959 Darwin Centennial Celebration in America, Clark Elliot and Pnina Abir-Am eds. Commemorations of
Scientific Grandeur. Osiris 14 (1999a): 274-323. (pdf)

Organizing Evolution: Founding the Society for the Study of Evolution, 1939-1947, Journal of the History of Biology 27
(1994a); 241-309. (pdf)

Unifying Biology: The Evolutionary Synthesis and Evolutionary Biology, Journal of the History of Biology 25 (1992a):
1-65. (pdf)

The Voice of American Botanists: The Early History of the American Journal of Botany. American Journal of Botany
101(2014): 389-398. [fulltext=smocovitis&submit=yes&x=0&y=0](#)

Botany and the Evolutionary Synthesis (1900-1950), in Michael Ruse, ed. The Cambridge Encyclopedia of Darwin and
Evolutionary Thought, Cambridge University Press, 2013, pp. 313-322.

Dr. Kuhn, or: How I Learned to Stop Worrying and Love The Structure." In A Repository for More than Anecdote: Fifty
Years of The Structure of Scientific Revolutions. Special Section of Historical Studies in the Natural Sciences 42(2012):
564-569.

Humanizing Evolution: Anthropology, The Evolutionary Synthesis and the Prehistory of Biological Anthropology (1927-

1962). *Current Anthropology*, 53 (2012). Online edition. (pdf)

Genetics Behind Barbed Wire: Masuo Kodani, Émigré Geneticists, and Wartime Genetics Research at Manzanar Relocation Center, 1942-1945," *Genetics* 187 (2011): 357-366. (pdf)

Where are We? Historical Reflections on Evolutionary Biology in the Twentieth Century, in M. Bell, D. J. Futuyma, W. F. Eanes, and J. S. Levinton (eds.) *Evolution Since Darwin: The First 150 Years*. Sinauer Press, 2010, pp. 49-58.

Marjorie, Matriarchy, and "Wretched Reflection": A Personal Remembrance of Marjorie Grene, *Biological Theory* 4(2009e): 191-195.(pdf)

Mongrels and Hybrids: The Problem of Race in the Botanical World, in Paul Farber and Hamilton Cravens eds. *Race and Science Scientific Challenges to Racism in Modern America* Oregon State University Press (2009d): 81-91. (pdf)

Singing His Praises: Darwin and His Theory in Song and Musical Production, *Isis*, 100 (2009c):590-614.(pdf)

The Unifying Vision: Julian Huxley, The Evolutionary Synthesis and Evolutionary Humanism, in Geert Somsen and Harmke Kamminga eds. *Pursuing the Unity of Science: Ideology and Scientific Practice between the Great War and the Cold War*. Ashgate Press, 2009b. (pdf)

Darwin's Botany in *On the Origin of Species*, in Michael Ruse and Robert J. Richards, eds. *The Cambridge Companion to Darwin's Origin*. Cambridge University Press, 2008a. Chapter 12, pp. 216-237. (pdf)

Darwin of the Twentieth Century: Defender of the Faith. A Profile of Ernst Mayr (1904-2005). *Biological Theory* 2 (2008b): 1-4. (pdf)

Foreword: Rewriting a Life. Introduction to the *Ladyslipper and I*, by G. Ledyard Stebbins, in Victoria Hollowell, Vassiliki Betty

Smocovitis and Eileen Duggan eds. *The Ladyslipper and I* by G. Ledyard Stebbins, Missouri Botanical Garden Press, 2007a. (pdf)

Pas de Deux: The Biographer and the Living Biographical Subject, in Thomas Soderqvist, ed. *The Poetics of Biography in Science, Technology and Medicine*. Ashgate Press, 2007b. pp. 207-219.(pdf)

柿原泰 Yasushi KAKIHARA

東京海洋大学 海洋科学系 海洋政策文化部門 准教授

論文 福島「県民健康管理調査」の現在史へ向けて 生物学史研究 (87) 21-25 2012年9月
日本における植民地帝国大学史研究の現状と課題 科学史研究 48 36-40 2009年3月
低線量放射線被曝リスクをめぐる最近の動向——BEIR VII 報告を中心として 市民科学 (13) 20-21 2006年
ECRR の背景と放射線の線量規制にかかわる国際・国内諸機関 どうよう便り (85) 8-10 2005年
技術倫理の生成——そのコンテキストと科学技術論の視点 現代思想 29(10) 186-194 2001年8月
巨大科学技術と「通常事故」——核／原子力時代の恐怖をめぐる 現代思想 29(7) 192-197 2001年6月
ネオリベラル・テクノクラシー批判 現代思想 29(2) 122-135 2001年2月
お雇い外国人とイギリス帝国のエンジニア——新たなお雇い外国人研究にむけて 東京大学史紀要 (18) 33-44 2000年3月
「通史」というアポリア——テッサ・モーリス＝鈴木の本日本技術史を読む 科学史・科学哲学 (14) 130-137 1998年3月
大北電信会社日本進出の経緯 電気学会研究会資料 (HEE-97-15) 35-40 1997年
近代日本の工学教育における科学と実地の相克——工部大学校における電信工学 年報 科学・技術・社会 5 1-20 1996年6月
工部大学校における「科学と実地」問題——電信工学教育を事例として 大学史研究 (10) 46-56 1994年10月

加藤茂生 早稲田大学 人間科学学術院 専門 科学史、科学論

1990年九州大学理学部物理学科卒業

2000年東京大学大学院総合文化研究科博士課程広域科学専攻単位取得退学

日本大学文理学部助手、専任講師を経て、2004年10月より現職

「環境」人間科学（人間科学と社会 —植民地における人類学・精神医学—）朝倉書店 2008年

科学技術社会史 —帝国主義研究視閥中的科学技術—（植民地科学的展開）遼寧科学技術出版 2008年

科学技術社会史 —帝国主義研究視閥中的科学技術—（植民地科学史研究的理論与方法）遼寧科学技術出版社 2008年

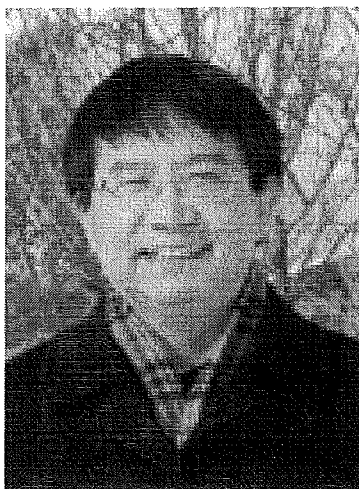
戦後思想の名著50（高木仁三郎 —市民の科学をめざして—）平凡社 2006年

科学の外延 —植民地科学の視点から— 現代思想 29/10, 176-185 2001年8月

日本統治下の台湾における精神医療 第一回東アジア近代史青年研究者交流会議論文集 1-12 2002年

上海自然科学研究所における研究と科学者の行動規範 歴史学研究 /781, 95-103 2003年

周程



1964年生，东京大学交叉科学系（科学技术基础论方向）博士，北京大学哲学系教授、博士生导师。

兼任中国软科学研究会常务理事，中国自然辩证法研究会常务理事、科学技术与社会专业委员会副理事长、科学·技术·工程伦理专业委员会副理事长、科技方法论专业委员会副理事长等职。曾任东京大学尖端科学技术研究中心科技政策室外籍特聘研究员，北京大学科学与社会研究中心副主任，早稻田大学孔子学院中方院长、留学中心客座准教授，东京大学教养学部课程主讲教师。

研究领域：科学技术与社会、创新管理与科技政策 Email : zhoucheng@pku.edu.cn

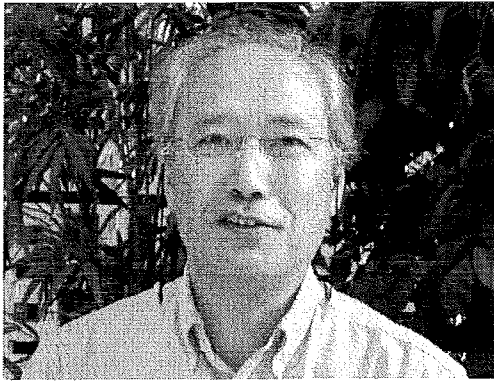
主要成果目录：

- 1.《福澤諭吉と陳独秀·東アジア近代科学啓蒙思想の黎明》（东京大学出版会，2010年）；
- 2.《科技创新典型案例分析》（北京大学出版社，2011年）；
- 3.《重大科技创新案例》（山东教育出版社，2011年）；
- 4.《中国航天事业发展的哲学思想》（北京大学出版社，2013年）；
- 5.《近代科学为什么诞生在西方》（北京大学出版社，2010年）；
- 6.<「科学」の中日源流考>（岩波书店《思想》2011年第6期）；
- 7.<应该确立大学在我国基础研究中的主体地位>（《科学学研究》2011年12期，《新华文摘》2012年第6期）；
- 8.<“科学”的起源及其在近代中国的传播>（《科学学研究》2010年第4期，《中国社会科学文摘》2010年）；
- 9.<诺贝尔化学奖究竟应该授给谁？——MALDI的研究发表竞争透视>（《科学技术哲学研究》2009年人大书报资料中心《科学技术哲学》2010年第2期）；
- 10.<学問体系における『脱亜論』——福沢諭吉の儒教批判の論理>，日本法政大学国際日本学研究所編《国際日本学研究叢書 11:異文化としての日本》（法政大学国際日本学研究センター，2010年3月）；

近年科研项目：

- 1.科技部创新方法工作专项课题“基于创新方法的科技项目知识产权管理模型优化”，在研，主持人；
- 2.中国运载火箭技术研究院“中国航天工程的预研创新管理模式”，在研，主持人；
- 3.中国科学院“冷战时期日本对西方科学技术的消化与吸收研究”，在研，主持人

杉山 滋郎(すぎやま しげお) Shigeo Sugiyama 道大学大学院理学研究院教授



1950年富山県高岡市生まれ。東京工業大学理学部応用物理学科卒業。物理学から科学史研究の道に転身し、東京大学大学院理学系研究科 科学史・科学基礎論専攻を単位取得退学。筑波大学講師、北海道大学理学部助教授を経て、現在、北海道大学大学院理学研究院教授、博士(学術)。専門は科学史、科学技術コミュニケーション、科学技術社会論。2005年から北海道大学 CoSTEP(現、高等教育機能開発総合センター 科学技術コミュニケーション教育研究部)の代表を勤める。

ポピュラー・サイエンスとポピュラー科学史：アカデミック科学史はポピュラー・サイエンスといかに向き合うか：2007年度年会報告 塚原東吾, 武田時昌, 松丸淳生, 佐倉統, 杉山滋郎 科学史研究. 第Ⅱ期 47(248) 223-230 2008年
1A1-S1 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニットの取り組みと成果(サイエンス・コミュニケーション活性化のための人材養成の現状と活動展開,学会企画課題研究,転換期の科学教育) 杉山滋郎
年会論文集 31 143-146 2007年8月 科学技術コミュニケーターの育成：大学において(〈特集〉サイエンス・コミュニケーション) 杉山滋郎 科学教育研究 31(4) 287-294 2007年 星野華水による“チャート式”の起源とその特徴 中村滋, 杉山滋郎
科学史研究. 第Ⅱ期 45(240) 209-219 2006年

HOSHINO Kasui (1885-1939), who graduated in mathematics from Tokyo Higher Normal School, wrote and published *The Study of Geometry by the CHART System*, a math study book for entrance exams, in 1929. Since then, the study books, which are named *CHA*..

科学技術と社会：サイエンス・コミュニケーション(3) 杉山滋郎 年次学術大会講演要旨集 21(1) 550-551 2006年

末永恵子 Keiko SUENAGA 文学修士 東北大学 1996/03 博士(文学) 東北大学 1998/03

研究分野: 科学社会学・科学技術史 思想史 医学史 日本史 日本近現代史 日中関係史

研究テーマ: 戦争と医学 戦争 近代日本における医学・医療、日本の近現代史における医学研究の倫理
医学犯罪、植民地医療、近現代史における対外的医療支援、軍陣医学、感染症対策と人権

末永恵子 死体は見世物か—「人体の不思議展」をめぐる— 大月書店 2012/08/06

末永恵子・福田俊章・藤野美都子 新聞にみる福島の医療 アカデミア・コンソーシアムふくしま 2012/03/15

刈田啓史郎、一戸富士雄、末永恵子、河相一成 「戦争と医学」座談会 68—95 刈田啓史郎 戦争と医学—七
三一部隊等の加害責任を問う— みやぎ憲法九条の会 2010/08

福島県立大学の歴史 福島県立医科大学 2006/01

軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会 戦時医学の実態—旧満州医科大学の研究 樹花舎 2005/10
死者との和解を求めて 季論21 19, 74-85 2013/01

谷昭典著『植民地医育論—台湾、朝鮮、“満蒙地域”を中心として』 15年戦争と日本の医学医療研究会会誌 13/ 1,
41 2012/11

書評:『重い障害を生きるということ』 15年戦争と日本の医学医療研究会会誌 12/ 2 2012/05

アジア太平洋戦争期における医育教育機関の卒業生の戦没者について 15年戦争と日本の医学医療研究会会
誌 12/ 1, 15-21 2011/12

西里扶爾子・末永恵子・王選 中国浙江省衢州・崇山村・義烏における細菌戦被害の聞き取りの調査報告 15年
戦争と日本の医学医療研究会会誌 11/ 2, 21-34 2011/05

日中戦争期における対中国医療支援事業の変容—同仁会の医療支援について— 宮城歴史科学研究 68・69
合併号, 21-60 2011/03

「人体の不思議展」の倫理的問題点について 生命倫理 20, 52-59 2009/09

日中戦争期の同仁会による対中国医療支援 日本の科学者 44/ 8, 42-43 2009/08

生理学者横山正松と戦争(下) 日本生理学雑誌 71/ 7・8, 247-255 2009/07

生理学者横山正松と戦争(上) 日本生理学雑誌 71/ 6, 223-231 2009/06

末永恵子・西山勝夫・刈田啓史郎・吉中文志・一戸富士雄 第6次訪中調査団報告 2008年9月17日~23日 15
年戦争と日本の医学医療研究会会誌 9/ 2, 14-22 2009/06

戦時下日本の関東軍要塞が映す戦争犯罪 日本の科学者 44/ 5, 40-43 2009/05

戦争と医師—医師の戦争体験と反戦・反核運動 月刊保団連 993, 47-53 2009/03

南京事件の難民への医療支援—南京安全区国際委員会と同仁会— 15年戦争と日本の医学医療研究会会誌 9/
1, 13-18 2008/10

生体実験を拒否した生理学者 横山正松 日本医史学雑誌 54/ 3, 239-248 2008/09

戦争と医学—熱河侵攻時の医療・医学研究を事例に— 九条の会・医療者の会ニュース 6, 13-16 2008/04

末永恵子・刈田啓史郎・昭三・西山勝夫・西山登紀子・一戸富士雄・岡田麗江・吉中文志・Suzy Wang・土屋
貴志 「戦争と医学」第5次訪中調査団活動記録 15年戦争と日本の医学医療研究会会誌 8/ 2, 37-55
2008/03

15年戦争期の大学における医学研究—旧満州医科大学を事例として—日本の科学者 43/ 2, 16-21
2008/02

鈴木晃仁 Akihito Suzuki

略歴： 1986年 東京大学卒（教養学科） 1992年 ロンドン大学 Ph.D. 1997年より現職

最終取得学位： Ph.D. 医学史 ロンドン大学 (1992)

所属学会： Society for Social History of Medicine; American Association for the History of Medicine; 日本医史学会（評議員）; 日本精神医学史学会（監事）

専攻・研究領域： 医学史

主要業績：

Madness at Home: the Psychiatrist, the Patient and the Family in England 1820-1860 (Berkeley: University of California Press, 2006)

Science of the Body and the Mind, vol.2 of Literature and Science 1660-1834 (London: Pickering and Chatto, 2002), co-edited with Clark Lawlor

『分別される生命—20世紀社会の医療戦略』（東京：法政大学出版局、2008 予定）川越修と共編

『身体医文化論 IV—食餌の技法』（東京：慶應義塾大学出版会、2005）石塚久郎と共編

『身体医文化論—感覚と欲望』（東京：慶應義塾大学出版会、2002）石塚久郎と共編

Publications III: Articles in Academic Journals and Books (学術誌・学術書掲載論文)

“Individual Lifestyle and State Policy: Prevention of Cholera in Modern Japan”, in Hormoz Ebrahimnejad ed., Medical Modernization in the International Perspective (London: Routledge, 2008 forthcoming).

“Global Theory, Local Practice: Psychiatric Therapeutics in Japan in the Twentieth Century”, in Thomas Mueller and Waltraud Ernst ed., Transmission of Ideas in History of Psychiatry (London: Routledge, forthcoming)

“Lunacy and Labouring Men: Narratives of Male Vulnerability in Mid-Victorian London”, in John Pickstone and Roberta Bivins eds., Medicine, Madness and Social History (London: Palgrave, 2007).

“Revisiting Moral Treatment: Psychiatric Therapeutics in England 1650-1850”, 『日本医史学雑誌』 52 卷(2006)

“Were Asylums Men’s Place?: Male Excess in Asylum Population in Japan in the Early Twentieth Century”, in Marijke Gijswijt-Hofstra et.al. eds., Culture of Psychiatry (Amsterdam: University of Amsterdam Press, 2005), 295-311.

“ψυχιατρική θεραπευτική και το κοινό στην αγγλία το δεκάτο ογδοο και δεκάτο ενάτο αιώνα”, Harvard Review of Psychiatry, Greek Edition, 10(2003), 105-108.

“A Brain Hospital in Tokyo and Its Private and Public Patients, 1926-1945”, History of Psychiatry, 14(2003), 337-360.

“Family, the State and the Insane in Japan 1900-1945” in Roy Porter and David Wright eds., Psychiatric Confinement in International Perspective (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), 193-225.

“Psychiatric Therapeutics and ‘the Public’ in England in the Eighteenth- and the Nineteenth Centuries”, Harvard Review of Psychiatry, 10(2002), 123-26.

神戸 STS 研究会 「神戸 STS」叢書 刊行中

シリーズ1

「東アジアにおける科学技術と社会」神戸 2002 東アジア STS シンポジウム報告

シリーズ2

「日本帝国主義と科学・技術・社会」2002 年東アジア科学史シンポジウム報告

シリーズ3

塚原東吾・三上岳彦・内藤智子編著「気象学と歴史学の遭遇：環境史・気候変動シンポジウム：東アジアからのパースペクティブ」神戸 2003 歴史気象学シンポジウム報告

シリーズ4

杉山まみ・玉置太郎・小笠原博毅・塚原東吾編著「国籍 重信メイとの対話」神戸大学 2004 塚原研・小笠原研合同ゼミ報告書

シリーズ5

塚原東吾編著「科学と帝国主義 日本植民地の帝国大学の科学史」2006

シリーズ6

「現代の革命家(1) ジョゼ・ボヴェ：マクドナルドの平和的解体へ WTO 批判の可能性と楽しい人生」(未刊)

シリーズ7

「現代の革命家(2) ヴァンダナ・シヴァの示す世界：グリーン・レボリューションと GMO の幻影を超えて」(未刊)

シリーズ8

横山聡子編著「震災の記憶：その表現をめぐる省察と対話」2011

シリーズ9

塚原東吾・立石俊英編「Science and Empire, what is the “British” Networks of Science?」2014

シリーズ 10

井上雅俊編「Ian Ash 監督とフクシマをガチで考える。映像に何ができるか？ 映像で何をしようとしているのか？」A2-B-C 上映会、討論資料 2014

シリーズ 11(本書)

塚原東吾他編「満州の科学・医学史、核をめぐる戦時科学の連続性」2014

帝国日本の知識ネットワークに関する科学史的研究会主催 第4回 国際ワークショップ

満州の科学・医学史、核をめぐる戦時科学の連続性：研究の最前線から

日程：2014年12月6日（土曜日）－7日（日曜日）

会場：神戸大学・百年記念館

主催：科研費・基盤研究（A） 「帝国日本の知識ネットワークに関する科学史研究」（2012年度～2015年度、研究課題番号：24240108、研究代表者：慎蒼健・東京理科大学）

共催：挑戦的萌芽研究「中国コロニアル沿岸都市のメディア・ネットワークと東アジアの気候変動」（2013年度～2015年度、研究課題番号：25560129、研究代表者：塚原東吾・神戸大学）；神戸STS研究会

後援：日本科学史学会・阪神支部会

2014年12月 発行

編集および編集責任者、発行人 塚原東吾 松本佳子(神戸STS研究会)

編集協力 慎蒼健

印刷 一印刷

連絡先

〒657-8501 神戸市灘区1-2-1 神戸大学 国際文化学部 塚原東吾研究室

Tel/fax.078-803-7435

e-mail: tsukaken2011@gmail.com

URL: <http://tsukaken2.world.coocan.jp/>

2014年12月 神戸 STS 研究会
「神戸 STS 叢書」シリーズ 11

神戸 STS 研究会 代表 塚原東吾

連絡先 〒657-8501 神戸市灘区 1-2-1 神戸大学 国際文化学部 塚原東吾研究室

Tel/fax.078-803-7435 e-mail: tsukaken2011@gmail.com